

指 定 理 由 書

名 称 ・ 員 数	鉄舌長鐙 1点
法 量	残存高 25 cm、長さ 34.4 cm、幅 10.5 cm、舌先幅 8 cm
所 有 者	平塚市（平塚市博物館所蔵）
所 在 地	平塚市浅間町 9 番 1 号
種 別	有形文化財（工芸品）

本資料は昭和 15 年（1940）頃、相模川の馬入川鉄橋の下流付近で砂利採取船による砂利採取中に引き上げられ、その後地元で保管されていた資料である。平成 16 年（2004）8 月 26 日に市内老松町在住の市民より平塚市（平塚市博物館）に寄贈された。

「^{したながあぶみ}舌長鐙」は「^{ぶさざな}武蔵鐙」とも呼ばれ、馬上での運動性や安定性を重視して^{ふんごみ}踏込部を長くしたもので、平安時代に武家を中心に成立した形態である。

本資料は花卉形鉄製^{もんかなもの}紋金物の位置から左側の装備である。鉄製の舌長鐙で、残存高 25 cm、^{ほとむね}鳩胸先から舌の先端までの長さ 34.4 cm、幅は鳩胸位置の最大値 10.5 cm、舌の先端で 8 cm、^{もんいた}紋板は幅 5～5.8 cm を測り、長方形の 4 個の透かしが穿たれる。透かしの下中央に^{ほろあな}母衣穴を穿つ。^{さすが}刺金下には花卉型の鉄製紋金物を施す。^{かがしら}鉸具頭は上部をちぎられたように欠失し、実際の使用に伴う破損と摩耗と考えられる。刺金と横軸は欠損している。

鎌倉時代の同種の鐙には、東京都青梅市御嶽神社奉納品一双と東京国立博物館所蔵品二双、京都府京都市（財団法人）高津古文化会館所蔵品一双があり、これらの資料と大きさや形状、鳩胸の形態、透かし穴の配置などが近似している点から、本資料も鎌倉時代のものと判断できる。

舌長鐙について鎌倉時代の遺例は極めて少ない。鐙が実用的な道具であり消耗が激しいこと、更に消耗した場合でも鉄材として再利用されたことなどが考えられる。また、その後の時代の資料でも神社への奉納品として、あるいは武家の宝物として伝世されたものがほとんどであり、実際に使用され、かつ出土という形で特定の地域との関係が捉えられるケースは珍しい。

本資料は本邦の馬具変遷を示す希少な実物資料であるとともに、平塚の中世史を語るうえで欠くことができない資料である。当該資料を本市の指定文化財とするのが望ましい。